

---

**第 143 回松本歯科大学大学院セミナー**

**日 時:** 2007 年 4 月 6 日(金) 16 時 00 分~17 時 30 分

**場 所:** 実習館 2 階総合歯科医学研究所セミナールーム

**演 者:** 高橋 慶壮 氏 (本学大学院硬組織疾患制御再建学講座・教授)  
成瀬 啓一 氏 (山形市開業歯科医)

**タイトル:** インプラント治療における骨増大術の EBM を目指して

1952 年にブローネンマルク博士によってチタンと骨が接合する現象、すなわち Osseointegration(骨接合)が発見され、1965 年にヒトで適応されて以来、インプラント治療と研究が行われている。インプラント治療は最初に無歯顎患者へ適応され、その後、歯周炎患者や矯正治療にも応用されている。治療概念については、外科主導から補綴主導へ、またロングインプラントからショートインプラントへ、Minimal invasion を念頭においたインプラント治療にパラダイムがシフトしてきた。

インプラント治療の適応症は骨増大術の確立とともに拡大している。骨内欠損と骨外欠損では治癒形態が異なり、骨内欠損の場合には組織再生に必要な三要素、スペースメーカー、シグナルおよび骨髄の未分化間葉系細胞の遊走が期待できるので、抜歯即時インプラント埋入、スプリットクレストおよびエクステンションクレストは骨増大に有効な術式であろう。上顎洞底挙上術(ソケットリフト、サイナスリフト)の予後も良好である。一方、骨外欠損に対する低侵襲性の骨増大法の確立が望まれる。また、骨増大術では、自家骨、他家骨あるいは人工骨(骨補填材)が使用されているものの、各種骨補填材の有用性についてのエビデンスがほとんど無いので、組織、細胞および分子レベルの研究が必要である。

本セミナーでは、骨増大術の治療概念とその実際について報告し、インプラント治療における骨増大法の今後の展望について考察したい。

担当:硬組織疾患制御再建学講座 高橋 慶壮